

感染症定期報告感染症別文献一覧表(医療機器2023/4/1~2023/9/30)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	インフルエンザ	Emerg Infect Dis. 28 (2022)2561-2564	デンマークでのブタ由来インフルエンザAウイルスの重篤な症例。50代男性が、2021年11月23日の夜に、胸の痛み、左腕に向かって放散する痛み、下痢、倦怠感に続き、めまいを急性発症し、翌朝まで続いたため、入院した(2021年11月24日)。なお、熱はなかった。救急車の輸送中及び病院到着時に、患者は繰り返し痙攣し、集中治療室で、発作とそれに伴う酸素レベルの低下を管理するために機械的換気が行われた。臨床検査(生化学的、微生物学的、免疫学的アッセイ)、多臓器放射線検査、脳波検査などの臨床検査では、突然の重篤な症状を説明できる心血管、腎臓、神経、又はその他の疾患は特定されなかった。しかし、地元の微生物学研究所で採取された気管サンプルを分析したところ、ブタ由来インフルエンザAウイルスに対して陽性であることが判明した。新型コロナウイルスを含むその他の微生物は検出されなかった。患者は抗ウイルス剤の投与と様々な支持療法により2日で病状は改善し、まもなく退院した。サンプルはデンマーク国立インフルエンザセンターでパンデミックH1N1株に対して陽性であることが確認され、GISAIDにてA/Denmark/36/2021と名付けられたウイルスのコンセンサス配列がアップロードされた。WGSはH1N1サブタイプを確認した。しかしながら、ウイルスは他のヒト株よりもブタのインフルエンザウイルスにより近い相動性をもっていた。患者はデンマークの豚肉処理場で働いており、手袋やガウンを含む防護装備であったが、マスクはしていなかった。患者の職場や近辺でインフルエンザウイルスの感染報告はなかった。本症例は過去にデンマークで報告された感染とは遺伝的に異なるため、限定的なものであると示唆された。
2	インフルエンザ	Emerg Infect Dis. 29(2023)98-109	ヒトに感染するH3亜型のA型インフルエンザウイルス(IAV)における主要なH3系統を代表する4つの鳥、1つの馬、3つのブタのIAVについて、ヒトへのリスクを判断するため、ベルギーで2017~2018年に286人から採取した血清について、これらの動物由来IAVに対する赤血球凝集阻害抗体及びウイルス中和抗体を調べ、ヒト気道上皮における複製を検査した。北米のブタ由来の循環型IAVの血清陽性率は51%以上、欧州のブタは7%~37%、鳥類・馬は12%以下であった。北米のブタのクラスターIAVと欧州のブタのIAVは効率的に複製され、馬と家禽のIAVは中程度、野鳥のIAVと北米の新しいヒト型ブタのIAVは複製されなかった。公衆衛生上のリスクは、ブタのH3 IAVが最も高い可能性がある。
3	インフルエンザ	Viruses. 15(2023)980	インフルエンザウイルスは、ヒトを含む様々な動物に感染する。1918年から2009年にかけて、4回のパンデミックが発生し、数百万人の死傷者を出した。中間宿主の有無にかかわらず、動物性インフルエンザウイルスがヒトに頻繁に流出することは、人獣共通感染症やパンデミックの深刻な脅威となる。今回のSARS-CoV-2/パンデミックは、動物性インフルエンザウイルスがもたらす高いリスクは影を潜め、パンデミックウイルスのリザーバーとしての野生動物の役割を浮き彫りにした。本総説では、ヒトにおける動物性インフルエンザウイルスの発生状況を整理し、人獣共通感染症ウイルスの混合容器又は中間宿主となりうる動物性インフルエンザウイルスについて述べる。人獣共通感染症のリスクが高い動物性インフルエンザウイルス(鳥インフルエンザウイルスやブタインフルエンザウイルスなど)がある一方で、人獣共通感染症の可能性が低いが無視できるものもある(馬、イヌ、コウモリ、牛インフルエンザウイルスなど)。感染経路は、動物、特に家禽やブタからヒトへ直接、又は「mixing vessel(混合容器)」宿主におけるウイルスの再分化を通じて起こる可能性がある。現在までに、鳥類由来のウイルスによるヒトへの感染が確認されているのは3000件未満、不顕性感染については7000件未満である。同様に、ブタインフルエンザウイルスによるヒトへの感染も数百件しか報告されていない。ブタは鳥類型と人型の両方のレセプターを発現しているため、人獣共通感染症インフルエンザウイルスを生成するための歴史的な混合容器宿主である。しかしながら、両方のタイプのレセプターを持ち、混合容器宿主となりうる宿主も数多く存在する。動物性インフルエンザウイルスによる次のパンデミックを防ぐために、高い警戒が必要である。

ID	感染症(PT)	出典	概要
4	ウイルス性心筋炎	Scientific Reports. 13(2023)592	脳心筋炎ウイルス(Picornaviridae, Cardiovirus A)は、心筋炎、脳炎、生殖障害などを引き起こす同名疾患の原因ウイルスであり、特にブタに好発することが知られている。本疾患は1997年以降、養豚場で風土病的に発生していたが、最近、北イタリアで死亡例が増加したことから、ウイルスの進化と実際の感染拡大についてさらに詳しく調査することとなった。2013年から2019年にかけて収集されたイタリアの脳心筋炎ウイルス(EMCV)は、全体的に抗原安定性を示した。7つの異なる抗原部位の変化を明らかにすることができる、自社開発のELISAモノクローナル抗体に基づいて、検討したサンプルでは散発的かつ時折の変異のみが示され、その後の系統解析により抗原パネルが確認された。すべての分離株は、他の欧州の株を含む独自の系統に分類され、現在イタリアで流通しているウイルスは、独自の共通祖先から発生したことが確認された。ウイルスの安定性は証明されたものの、抗原プロファイル解析と系統樹により、新たに出現したと思われる変異体はいくつか検出された。最後に、血清調査により、EMCVの無症状の循環により、致死性感染の拡散が示唆するよりも、EMCVが広く拡散されていることが証明された。また、過去のデータと比較すると、血清陽性の農場の割合が増加していた。イタリアの変異株と密接に関連する菌株の人獣共通感染症の可能性と、ヒトと継続的に接触する家畜の無症状の循環が実証されていることから、EMCVは特別な警戒が必要である。
5	カンピロバクター感染	Acta Tropica. 237(2023)106702	カンピロバクター属菌は、世界中で最も一般的な細菌性胃腸炎の原因であることが示されている。ヒトカンピロバクター感染症の症例は通常、散発的に報告され、アウトブレイクに含まれないため、感染源の特定が困難である。ナイジェリアにおけるヒトカンピロバクター感染症の感染源を特定するために、ナイジェリアにおける分離株集団間の関係の研究と、ナイジェリアのヒトカンピロバクター属菌と他の動物分離株の感染源帰属分析が実施された。その結果、屠殺場、農場、生鳥市場から分離されたヒトと家畜の両方に共通する9つの配列型(ST)が示され、同様のSTが系統樹上で一緒にクラスター化し、ある程度の遺伝的類似性が確認された。感染源帰属分析によると、ナイジェリアにおけるヒトのカンピロバクター感染の最も重要な感染源は野鳥(38%)で、次いでニワトリ(23%)、ブタ(19%)、ウシ(11%)、ヒツジ(8%)であった。これは、ナイジェリア及び他の低所得国において、農作業やヒトの習慣により、これらの感染源がヒトにとって重要であることを示している可能性がある。
6	サルモネラ症	Emerg Infect Dis. 29(2023)314-322	アンピシリン、ストレプトマイシン、スルファメトキサゾール、テトラサイクリン(ASSuT)に耐性を示す <i>Salmonella enterica</i> I serotype 4,[5],12:i: 感染の報告が増えている。米国におけるこのサルモネラ菌による感染症の疫学、耐性特性、及び遺伝学について説明するために、5つの国家監視システムのデータを分析した。その結果、ASSuT耐性 <i>Salmonella</i> 4,[5],12:i: が2009~2013年のサルモネラ感染症の1.1%から2014~2018年の2.6%に増加し、この耐性パターンのない <i>Salmonella</i> 4,[5],12:i: 分離株の割合は同じ期間に3.1%から2.4%に低下していた。2015年から2018年にかけて配列決定された分離株のうち、合計69%が同じ系統発生クレードに属していた。このクレードのうち77%がASSuT耐性の遺伝的決定因子を有し、16%がシプロフロキサシン、セフトリアキソン、アジスロマイシンに対する感受性低下の遺伝的決定因子を有していた。多剤耐性菌に関連したアウトブレイクでは、63%が豚肉の摂取又はブタとの接触に関連していた。ブタの <i>Salmonella</i> 4,[5],12:i: 保有を防止すれば、この菌株によるヒトへの感染を防ぐことができると考えられる。
7	サルモネラ症	Euro Surveill. 28(2)(2023)24-33	2020年9月から2021年1月にフランスで全国的に発生した乾燥豚肉ソーセージが関与したサルモネラ・ポビスモルビフィカンスST142及び単相性サルモネラ・ティフィムリウムST34の複数血清型によるアウトブレイク。フランス国立大腸菌、赤痢菌、サルモネラリファレンスセンターは2つのヒトクラスターを確認した。1つ目のクラスターは2020年9月から11月にサルモネラエンテリカ血清型ポビスモルビフィカンスST142、HC5_243255(Enterobase HierCCcgMLST scheme)による感染で、33症例発生した(年齢中央値:10歳、女性17人)。2つ目のクラスターは2020年10月から12月にサルモネラエンテリカ血清型4,12:i:-, ST34、HC5_198125による感染で、11症例発生した(年齢中央値11歳、女性7人)。Sante Publique Franceによる疫学調査でこれらのアウトブレイクは同一メーカーの乾燥豚肉ソーセージの摂取と関連付けられた。サルモネラ・ポビスモルビフィカンスとサルモネラ4,12:i:-は国立リファレンス研究所より異なった食品サンプルから分離されたが、両株はqPCRによるのみ一つの食品サンプルから同定された。2020年11月にフランス農業・食糧省食品総局から乾燥豚肉製品の回収が3件公表され、8つのスーパーマーケットチェーンに影響を及ぼした。食品及び飼料に関する欧州緊急警報システムによる通知と、食品及び水媒介疾病及び人獣共通感染症疫学情報システムによる欧州緊急調査が開始された。フランス国外での報告はない。複数血清型のサルモネラによるアウトブレイクは微生物研究所の標準的な手順では検出されないことがある。
8	テニア症	International Journal of Infectious Diseases. 129(2023)274-284	ウガンダにおける人獣共通感染症である <i>Taenia solium</i> のサブナショナルなマッピング調査を実施し、高リスク地域を特定した。最終的な解析には、合計16の論文(ブタ囊虫症(PCC):11、人囊虫症(HCC):5)が含まれた。観測されたHCC有病率は0.01%~6.0%(信頼区間範囲:0.004~11.4%)、調整後のPCCは0.3~93.9%(不確実区間範囲:0~99.8%)の範囲である。また、モデル化されたPCC危険因子と有病率は、ウガンダ国内及び時間経過とともに大きく変動した。高いPCC有病率と中程度のHCC曝露量の推定値は、ウガンダにおける <i>T. solium</i> の制御努力を緊急に実施する必要性を示している。

ID	感染症(PT)	出典	概要
9	テニア症	PLoS Negl Trop Dis. 17(2023)e0011042	<p><i>Taenia solium</i>はヒトにテニア症を、ヒトとブタに囊虫症を引き起こす。東南部アフリカ(ESA)では、ヒトのテニア症及び囊虫症の存在に関する情報は乏しいようである。このシステマティックレビューは、ESAにおけるヒトの <i>T. solium</i> 感染の疫学について、現在入手できる情報とギャップについて説明することを目的とした。2000年1月1日から2022年6月20日までに国際データベース[MEDLINE(Ovid)、Embase(Ovid)、Global Health(Ovid)、Scopus(Elsevier)、African Index Medicus(who Global Index Medicus経由)、Open Grey]で公開された科学文献をESAについて系統的にレビューした。調査地域には、ESA地域を構成する27ヶ国が含まれた。この地域内の27ヶ国中16ヶ国で、テニア症、囊虫症、脳囊虫症(NCC)のいずれかの情報が入手でき、合計113件の報告がレビューされた。囊虫症及びNCCの症例報告の多くは南アフリカからであり、囊虫症の報告はタンザニアが最も多く集約されていた。NCCについては11ヶ国が報告し、7ヶ国がNCCとてんかんに関するデータを報告した。未確認のヒトのテニア症の症例が9ヶ国で報告され、2ヶ国(マダガスカルとザンビア)が確認されたテニア症の症例が報告された。囊虫症の血清有病率は、抗原(Ag)ELISAで0.7-40.8%、抗体(Ab)ELISAで13.1-45.3%の範囲であった。また、脳CT検査におけるNCC示唆病変の割合は調査集団により1.0~76%であった(immunoblot検査によるAb血清有病率は1.7~39.3%)。顕微鏡検査によるヒトテニア症の有病率は0.1~14.7%であった。ケニア、ルワンダ、タンザニア、ザンビアで実施されたCopro Ag-ELISA法による調査では、ケニアで19.7%と最も高い有病率が報告された。ブタの管理や食肉検査が不十分で、衛生状態が悪い場合、豚肉を食べない人も豚肉を食べる人と同様に囊虫症に感染するリスクがあると考えられた。また地域におけるヒトのテニア症は、ESA諸国におけるブタ囊虫症の高い有病率に起因している。特に農村部では、放し飼いのブタの飼育が簡単で安価であるために人気があり、一般的に屠殺場や豚肉の検査がなく、衛生設備が整っていないことと相まって、人々がテニア症や囊虫症に感染するリスクを高める要因となっている。ESAにおける <i>T. solium</i> の公衆衛生及び経済的影響にもかかわらず、この寄生虫の発生とその結果生じるOne Health疾患群に関する知識にはまだ大きなギャップがあり、テニア症及び囊虫症のモニタリングはほぼ実施されていない。</p>
10	ブドウ球菌感染	Transboundary and Emerging Diseases. 2023(2023)5540019	<p>家畜関連メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(LA-MRSA)クローン複合体398株は、ブタに広く分布しており、ヒトの医療における新興病原体と考えられている。ブタの生産環境における病原体の有病率、遺伝的特性、人獣共通感染症の可能性を調査するため、2019年にハンガリーの40の養豚場から、出席獣医師及びその他のブタの専門家(n=27)の鼻腔スワブとともにダストサンプルを収集した。MRSA分離株は、全ゲノム配列決定と感受性試験を行うことでさらに特徴づけを行った。同年、ヒト由来のLA-MRSA臨床分離株14株の全ゲノム配列も研究に含めた。コアゲノムマルチローカスシーケンスタイピング(cgMLST)解析により、環境由来とヒト由来の近縁分離株のクラスターが発見され、一対の対立遺伝子距離が24以下であったことから、cgMLSTと一塩基多型解析は農場環境と人間の最近の感染事象を示唆していた。ヒトの臨床分離株4株は免疫回避遺伝子群を保有しており、そのうち1株は農場分離株と密接に関連していると考えられた。ブタ関連株の半数は8種類以上の抗菌薬に対する感受性が低下しており、ヒト分離株と同様にcfrを含む8種類の多剤耐性遺伝子を保有していた。この結果は、2008年に欧州食品安全機関のベースライン調査で報告された2%の有病率と比較して、ハンガリーの豚産業におけるLA-MRSAの発生が飛躍的に増加していることを示していた。また、LA-MRSAの抗菌薬耐性は広範囲に及び、ヒト(無症候性保菌者、罹患者)においても発症していることから、LA-MRSAが公衆衛生にもたらすリスクについて見直しが必要とされている。</p>
11	マイコプラズマ感染	ProMED-mail 20230201.8708093	<p>Canterbury中部でウシの群れが <i>Mycoplasma bovis</i> に感染している件について、Ashnortonに近いWakanuiでウシの <i>M. bovis</i> の感染について独立した調査による見解が提示された。MPI(政府機関)、Dairy NZ and Beef & Lamb New Zealandは当該感染が明らかになり感染防止策を講じたにもかかわらず、小さな地域における当該感染症の蔓延が確認された2022年中期以降の実態について調査を指示した。発生の中心は広大なANZCO Fivestar Foodlotが保有する農場で、19000頭のウシを一時に飼育することが可能である。2022年5月にはFoodlotでは <i>M. bovis</i> に罹患した最後の領域について報告されていたが、より多くの領域で陽性の報告がなされたため、MPI(政府機関)はFeedlotの周囲地域及び近隣の農場を管理区域に設定した。これらハイリスク領域にある8つの農場全てで感染が判明。Feedlotの飼育数の減少が報告された。調査は独立した疫学博士(John Happold)により実施され、当該疾病が限定された領域でどのように感染していくか確認された。調査の結果、ヒツジやシカでは感染したミルクの摂取や初乳、又は農場間の車両や機器の移動での感染拡大は見られなかった。Feedlotにおける感染蔓延の仮説として中等度から強い因果関係が疑われる点として、Wakanui地域の他の農場からの感染が挙げられた。分子疫学調査の結果、Feedlotから半径1.5km以内に集中して感染症例を認めており、代替案となるその他の見解は調査結果から確認されなかった。Happold博士は <i>M. bovis</i> への空気感染についてこれまで発行されている臨床文献内では報告されておらず決定的なものではないが、広大で重度な感染症個体を有するグループから4-5kmを超えた空気感染に関するエビデンスは報告されている。他に現状を適切に説明し得るものがないため、空気感染による <i>M. bovis</i> 拡大がもっとも考え得る状況であると考察する。マイコプラズマ感染症プログラムを指揮するSimon Andrew博士は、疾病の根絶は良い成果を示しており、ハイリスク地域とされていた管理区域には現在ウシは保有されておらず、2023年3月中旬まで管理区域のトラッキングは継続されている。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
12	リフトバレー熱	ProMED-mail 20230322.8709082	WHOはリフトバレー熱(RVF)のアウトブレイクにより、死亡5例を含む30例に拡大したことを確認した。地域調査チームとウイルス研究所のチームにより、牧場労働者から検体を採取した結果、採取した51件の検体の5件がPCR検査でRVF陽性を示した。この5人は村の牧場で死亡したウシの解体に関わっていた。村々で亡くなっていく住民から採取し検査した結果、ウシからヒトに感染したアウトブレイクがあったと保健センターの医師は述べた。
13	レプトスピラ症	ProMED-mail 20230328.8709178	バヌアツにおいて、2023年3月17日から22日にかけて、新たにレプトスピラ症患者2名と死亡者2名が報告された。2023年に合計40例のレプトスピラ症患者が記録され、35例が研究所で確認され、5例が臨床的に診断された。Santo島で23例、Efate島で10例、Malekula島で4例、Maloで1例、Pentecostから1例、Erromangoから1例。2023年1月以降に記録された5人の死亡者:臨床診断による死亡者2人(1月にSanto島から1人、2023年2月にErromango島から1人)の報告、ラボでの確認死亡者3人(Santo島から2人、Efate島から1人、すべて2023年3月に報告)、感染経路:レプトスピラ症はバヌアツのウシやブタで記録されており、川で泳ぐことやウシやブタとの接触が、危険因子として特定されている。イヌやネズミもレプトスピラ症を媒介することがある。ヒトは、これらの動物の尿を含む水に触れた後、損傷した皮膚を通して感染する。
14	レンサ球菌感染	Medicine. 101(2022)e32414	75歳の男性が、発熱、嘔吐、咳、悪寒、意識不明で来院した。敗血症と頭蓋内感染の診断で入院となった。胸部CTで両側肺炎を認めた。血液培養で小コロニーを認め、 <i>S. suis</i> (レンサ球菌)と同定された。抗生物質感受性試験の結果、病原体はレボフロキサシンに感受性があることが判明し、レボフロキサシンによる治療が実施された。調査の結果、患者は病気のブタの肉を喫食していたことが判明した。
15	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20230315.8708940	ベトナム保健省は、ここ数ヶ月の間に多くのヒトへの感染が確認されたことを受け、ブタ由来の細菌である豚レンサ球菌の疑い例に対する警戒を医療機関に促したと現地メディアが2023年3月14日に報じた。2023年の初めから、全国でいくつかのレンサ球菌感染が記録されており、その大半は、blood pudding(血液入りソーセージ)などの豚肉製品を食べた人、又はブタを屠殺したヒトが感染していると、保健省の引用でベトナムニュースが報じた。患者は、深刻な臨床症状に苦しみ、長期的に高価な治療が必要である。いったんウイルス[<i>S. suis</i> はウイルスではなく細菌]に感染すると、病状は急速に進行し、敗血症性ショック、昏睡、多臓器不全などの合併症に至る。同省の感染症監視システムによると、2023年の1ヶ月間に、全国で多くのレンサ球菌感染が記録されていることがわかった。同省によると、患者の大半は、blood pudding(血液入りソーセージ)などの豚肉製品を食べた人、又はブタを屠殺したヒトである。患者は、重い臨床症状に苦しみ、長期的に高価な治療が必要である。いったん[細菌]に感染すると、病状は急速に進行し、敗血症性ショック、昏睡、多臓器不全などの合併症に至る。1960年に最初の患者が発見され、それ以来、約490人の患者が発生し、死亡率は17.5%となっている。潜在的な感染リスクを回避するために、blood pudding(血液入りソーセージ)を食べるのをやめ、豚肉を適切に調理するよう助言している。さらに、病気や死亡したブタの購入、輸送、屠殺を避け、ブタと接触する際には、保護手袋を使用するよう呼びかけている。 <i>S. suis</i> はブタの重要な病原体で、主に離乳後の子豚に突然死を伴う敗血症、髄膜炎、関節炎、心内膜炎を引き起こす。 <i>S. suis</i> は、無症状のブタからも検出されており、通常は咽頭から、また生殖管や消化管からも検出されている。
16	レンサ球菌感染	Scientific Reports. 13(2023)5380	<i>Streptococcus suis</i> (豚レンサ球菌)は人獣共通感染症の病原体で、ヒトやブタに侵襲的な感染症を引き起こす。 <i>S. suis</i> の血清型は2が最も多く、他の血清型も検出されることがある。ヒトと無症状のブタからそれぞれ回収したクローン複合体11に属する <i>S. suis</i> 血清型1のゲノムを調査した。系統解析の結果、 <i>S. suis</i> 血清型1の2株(ヒト及びブタ)と近縁株のゲノム配列を比較したところ、相違する領域はほとんどなく、比較的重要な類似性があることがわかった。
17	丹毒	臨床と微生物. 49(2022)393-396	<i>Erysipelothrix rhusiopathiae</i> (豚丹毒菌)は、人獣共通感染症であるがヒトからの報告例は少ない。その原因として本菌が正確に同定されなかった可能性がある。患者背景や集落性状から本菌を疑い、硫化水素産生性などで類縁菌との鑑別を行うことが必要である。
18	大腸菌性胃腸炎	Zoonoses Public Health. 70(2023)117-124	腸管病原性大腸菌(EPEC)は、ヒトの急性下痢に関連する病原体である。健康な家畜から分離されたEPECが、下痢症状のあるヒトから分離されたEPECと同じ病原性遺伝子レパートリーを持っているかどうかを判断するために、下痢症状のあるヒトからの6つの典型的なEPEC (tEPEC)と20の非定型的なEPEC (aEPEC)と、健康な動物(ブタ、ヒツジ、バッファロー)からの42のaEPECについて、パルスフィールドゲル電気泳動(PFGE)、病原性マーカー、血清型及びeaeとtir遺伝子のサブタイピングを使用して比較した。ヒトと動物の分離株は、ヒトの下痢に関連するnleB、nleE、nleFなどの病原性遺伝子を共有していることがわかった。O26:H11、O128:H2、O76:H7、O103、O108、O111、O145などの家畜の分離株で特定された血清群と血清型は、以前にヒトの疾患に関与していた。サブタイプeaeとtirもヒトと動物の分離株間で共有され、eae- γ 1とeae- β 1が両方のグループで最も一般的であったが、最も一般的なtirサブタイプは α と β であった。PFGE分析では、ヒトと家畜から分離されたEPECはヒトの下痢に関連する病原性遺伝子など、いくつかの特徴を共有しており、家畜がそれらの遺伝子の貯蔵庫のような役割を果たしている可能性があることを示していた。

ID	感染症(PT)	出典	概要
19	旋毛虫症	J Helminthol. 96(2022)e83	セルビアで発生した2つの旋毛虫症のアウトブレイク-犬回虫の同時感染の可能性による難解な診断。セルビアの近接する2つの地区で、2014年8月のほぼ同時期に24名による旋毛虫症の2つのアウトブレイクが発生した。最初のアウトブレイクは加熱不足の豚肉が感染源であった。2つ目のアウトブレイクは生の豚肉ソーセージによって発生した。食肉サンプルとソーセージは人工消化法により、旋毛虫陽性であった。セカンドオピニオンを得ること及び発見された血清学的所見を公衆衛生研究所Nisで検証することを目的にすべてのサンプルを国立旋毛虫症リファレンス研究所に送付した。血清診断の結果、21名が旋毛虫抗体陽性(87.5%)で、3名が陰性であった。その内15名が旋毛虫症の症例定義を満たしていた。ウエスタンブロット解析により5名から旋毛虫症の診断が確認された。6名は犬回虫に対する特異抗体を有していた。セルビアでのエンデミックでは旋毛虫と犬回虫が存在し、2つの感染は無症候性であった。旋毛虫症の発生は証明されたが、犬回虫との同時感染については臨床所見に乏しく、疑いの余地が残った。
20	旋毛虫症	Outbreak NewsToday. https://outbreaknewstoday.com/argentina-trichinosis-outbreak-reported-in-santa-fe-province-62681/#:~:text=The%20Ministry%20of%20Health%20of,parasitic%20disease%20have%20been%20registered.	アルゼンチンSanta Fe州保健省は、同州の様々な場所で発生した旋毛虫症への警告を発した。現在まで、この寄生虫病の疑い例26件、確定例8件が登録されている。また、同州の保健当局は、衛生管理を経ていないソーセージ食品を避けるよう住民に呼びかけている。これらの製品は、Santa Fe州も例外ではないが、通常、国のルートや手段で販売されている。手作りだと衛生管理が行き届かないので、厚生省からは食中毒が発生する事例を常に調査されている。地方地区では、Granadero Baigorria(4例)、San Lorenzo(3例)、Rufino(1例)発症している。旋毛虫症とは、回虫である旋毛虫 spiralisによって引き起こされる寄生虫症である。加熱不十分な肉や生の肉を摂取すると、胃酸によって幼虫が放出され、腸内で成熟して成虫になる。保健当局は、主な感染源は管理されていない豚肉製品及びその精巧な派生物であると指摘する。
21	旋毛虫症	ProMED-mail 20230321.8709081	旋毛虫症が検出された為、アルゼンチン国立農業食品衛生品質サービス(Senasa)の命令により、Colonia Tirolesaの養豚場で238頭のブタが屠殺された。この国家機関は、定期的な作業中に18匹のブタから寄生虫が発見されたので、群を取り除き、動物を輸送する農場を管理したと報告した。屠殺されたブタのうち、この病気が陽性であるものは取り除かれ、陰性であるものは市場流通が許可されることも声明で明らかにした。これに伴い、旋毛虫症に感染したブタは、肉に匂い、味、色の兆候を示さないとSenasaは述べている。屠殺場が屠殺した動物を分析しなければならない。ブタを飼育する際の衛生対策も重要である。旋毛虫症は、ブタやイノシシ、ビューマなどの野生動物の筋肉に寄生する虫状の寄生虫によって引き起こされる病気である。生きた寄生虫の幼虫を含む肉や肉由来の食品を生や加熱不十分な状態で食べることで、誤って感染することがある。アルゼンチンでは、イノシシやビューマなど他の動物の場合もあるが、ヒトへの主な感染源は家畜のブタである。
22	炭疽	ProMED-mail 20230623.8710740	ガーナUpper East州で、炭疽病により合計97頭の動物が死亡した。2023年6月21日時点で、15地区のうち12地区で炭疽菌と疑われる動物の死亡例が報告されている。Binduri地区が38例、Garu地区が17例、Bawku West地区が13例である。Bongo地区、Bolgatanga市、Talensi地区ではそれぞれ8件、6件、5件、Garu-Tempane地区では4件、Bawku市、Builsa North地区、Pusiga地区ではそれぞれ2件、残りの2地区、Kassena Nankana市(KNM)とBongo地区ではそれぞれ1件であった[97件ではなく合計99件]。ヒツジが最も多く53頭、ウシが35頭、ヤギが5頭、ブタが2頭である[97ではなく95]。しかし、Kpong Tamale獣医学研究所での検査後、陽性例を報告したのは6地区のみであったと、食糧農業省獣医サービス局局長代理のPatrick Abakeh博士は説明した。対象となったのは、Binduri、Talensi、Bongo、Bawku West地区、Bolgatanga市、Kassena Nankana市である。Abakeh博士によると、農務省は感染拡大を食い止めるべく取り組んでおり、2023年6月21日までに合計100,000回分のワクチンを全地区に配布した。さらに、中央獣医学研究所で製造中のワクチン10万回分が来週までに配布される予定である。Abakeh博士によると、これまでに13地区すべてで23,449頭の家畜にワクチン接種が行われた。Abakeh博士によると、Binduri地区が9485頭で最も多く、次いでTalensi地区が7141頭であった。Bawku West地区、Bolgatanga市、Bongo地区ではそれぞれ2948頭、2468頭、1195頭がワクチン接種を受けている。全部で8189頭のウシ、7819頭のヤギ、6913頭のヒツジ、528頭のブタが予防接種を受けた。追加分が来週までに配布される予定である。数字は多少異なるが、これは最終報告書ではない。家畜の炭疽菌の大流行であることは明らかである。

ID	感染症(PT)	出典	概要
23	炭疽	Transbound Emerg Dis. 69(2022)e2563-e2577	炭疽病の原因菌である病原菌炭疽菌は、主に草食家畜、野生動物及び感染した動物の死骸又は製品との直接接触に曝露されたヒトに影響を及ぼす芽胞形成細菌である。現在までのところ、経済的及び公衆衛生の両面から炭疽病の重要性にもかかわらず、炭疽病の世界的分布の可能性を描写した研究は限られている。本研究では、94カ国における1954年から2021年までのヒト及び動物の確定症例の発生データ(n = 874)をまとめた。集合生態学的フレームワークを用いて、複数の分析尺度で相対リスクを測定するために、炭疽の世界的な予測生態学的適合性の更新マップを開発した。さらに、ウシ、ヒツジ及びヤギの対象集団に対する炭疽病に関連する疾患伝播リスクを定量化する地図を作成した。地球規模での炭疽菌の環境適合性は、ユーラシア、サハラ以南のアフリカ、米国、東南アジア、オーストラリア、オセアニア全体に集中している。周極スケールで炭疽菌に適した環境は、北極圏の上方で、ロシア、カナダ、アラスカ、北部スカンジナビアの一部に広がっている。炭疽菌の適合性に影響を及ぼす環境要因には、疣贅、地表温度、土壌の特性、主要な気象状況及び地形が含まれる。家畜に対する最大のリスクは、インド亜大陸、オーストラリア、アナトリア、コーカサス地域、中央アジア、欧州連合、アルゼンチン、ウルグアイ、中国、米国に集中している。本調査では、以前の調査では炭疽菌の空間的広がりの可能性を有する地域として南半球、サハラ以南のアフリカ、アジア、及び北半球の周極周辺地域であることを示した結果を更に拡大するものとなった。今回の調査により更新された地図は、疾病管理プログラムの指針となる関連情報を提供し、政策立案者に情報を提供し、当該環境に適した地域に位置する動物とヒトにおける炭疽菌罹患の発生率と死亡率を低下させるために世界レベルで認識を高める結果になると結論づけた。
24	炭疽菌感染	ProMED-mail 20230316.8708980	炭疽アウトブレイクの状況調査により、村の個人農場で行われた獣医業務に登録されていないウシの違法な家庭内屠殺の事実が確認された。ウシの健康状態悪化のため屠殺が行われた。屠殺前の獣医学、衛生学的検査は実施されなかった。屠体の処理過程で手を切ったことでヒトの感染が発生した。感染者である2名は炭疽で入院したが、病状は中等度である。疫学的調査の結果によると感染の原因は解体したウシ屠体との接触であった。
25	炭疽菌感染	ProMED-mail 20230322.8709103	ロシア消費監督庁はチュヴァシ共和国からモスクワに到着した市民に炭疽の疑われる症例があると報告した。次いで同庁は炭疽がヒトからヒトへ伝染しないこと、及び発病した家畜との直接接触で感染する可能性があることを周知した。チュヴァシ共和国で炭疽の兆候が3例目の住民で発見されたことが知られたが、そのヒトは感染したウシの解体に関わっていた。それ以前にチュヴァシ共和国で2人が中等度の炭疽の状態入院したことが分かった。疫学調査の結果によると、感染の原因はウシ屠体との接触であった。ロシア消費監督庁、チュヴァシ共和国及びウリヤノフスク地方支局によると患者は屠体処分時に手を切った炭疽に感染した。
26	狂犬病	ProMED-mail 20230208.8708237	2023年1月30日、テキサス州クック郡においてウシが狂犬病陽性であることが確認された。感染した10歳のウシはワクチン未接種で、呼吸異常が見られた。このウシは狂犬病の結果死亡し、州でさらなる検査を行うこととなった。残りのウシの群れは隔離され、ワクチンを接種された。当該ウシの処置にあたった人間5人がウシの唾液を浴びて感染し、治療を受けている。詳しい調査を実施しているところであるが、ウシは狂犬病に感染したスカンクとの接触により感染したと可能性があることが示された。州当局は、すべての動物の飼い主にペットや家畜のワクチン接種を行うよう呼びかけている。
27	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230203.8708133	レポート日: 2023年2月1日(水) 情報源: ドイツ政府プレスリリース 今週、南オランダでウシの死体(8歳)で牛海綿状脳症(BSE)陽性反応を示した症例が報告された。Wageningen Bioveterinary Researchで調査が行われ異型BSEタイプであることが特定された。異型BSEは年齢がいったウシに散発的に発症しており、年齢のいった固体へ発症するBSEタイプであるとされている。4固体で異型BSE発症が確認された。陽性の固体を保有していた会社は直ちに流通が阻止された。ドイツのFood and Consumer Product Safety Authority (NVWA)では感染源、接触範囲の調査を実施。当該固体の子孫(2歳以下)を調査のために屠殺した。脳組織においてBSEテストを行うため、まず屠殺処分を行う必要がある。NVWAにおける感染源、接触範囲の調査では当該固体の子孫5体の感染が確認された。そのうち1体は同一農場で生存していた。当該固体は2歳以下でテストのために屠殺された。残りの4体は2歳以上であり母牛からの感染の可能性は低く、固体自身で感染に至った可能性が考えられた。そのためそれらは公衆衛生上におけるリスク拡大のおそれはないと考えられた。全てのウシは感染したウシと同一の農場で誕生しており、生誕から12か月以内経過していた。これらの固体は生後1年目に感染したウシと一緒に飼育され、その期間に同じ汚染された可能性のある飼料を摂取していた。よって当該固体等も屠殺処分となりテストが行われた。調査対象となった固体は食物連鎖から除外されるため、食品安全へのリスクはない。大臣のPiet Adema氏はBSE陽性のウシが発生することは、最後の陽性固体を確認してから長期間が経過しているため我々にとっても非常にショックなことであると述べている。異型BSEであることが確認され安心している。異型BSEの場合は問題が発見された会社のみに限った処置がとられ収束することが殆どであり影響の範囲が想定しやすい。問題が発生した農場には重大な問題ではある。今回感染が確認された13固体は子孫の関係または一緒に飼育されていたため、屠殺処分がとられ調査を行った。拡大防止による流通訂正、感染したウシの隔離、屠殺処分等の対応により今回の感染は収束に向かっている。食品安全へのリスクはなかった。BSEモニタリングシステムは奏功しておりうまくいっていると評価している。

ID	感染症(PT)	出典	概要
28	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230204.8708164	<p>感染原因物質:牛海綿状脳症プリオン、異型株、L型 発症箇所:Zuid Beijerland, Korendijk, Zuid-Holland (南オランダ) 影響を受けた固体:種/疑わしい個体/感染数/死亡/と殺処分/商用対象に加工、処理された固体数/ワクチン接種 ウシ/91/1/9/1/0/0 疫学調査:感染発症場所の特定、感染現については未だ特定に至っていない。行政検査機関では2023年2月1日に異型BSEタイプのL-Type株であるとのこと。2014年10月5日に生まれた固体はBSEとは関連はないが臨床症状が出現していたためと殺処分となった。ドイツにおけるBSE監視モニタリングシステムの一環で行政テスト機関で8歳の個体の止血を実施し陽性との結果が得られた。当該固体の死体は破壊された。感染が特定された固体は食品加工プロセスには入らず隔離されているため、ヒトの健康へ影響はない。疫学調査は依然として継続中である。現時点の対策として国内の個体に対してトレーサビリティを強化し制限領域内は当然であるが領域外においてもモニタリングを継続している。</p>
29	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230213.8708338	<p>感染原因物質:牛海綿状脳症プリオン、異型株、H型 発症箇所:Pontevedra, Galicia 影響を受けた固体:種/疑わしい個体/感染数/死亡/と殺処分/商用対象に加工、処理された固体数/ワクチン接種 ウシ/1/1/-/1/-/- 影響を受けた群:ウシ(2020年10月23日出生)がBSEとは関連のない疾病の臨床症状により農場で安楽死された。サンプルは2023年1月31日にLCV登録に登録され、送信者はガリシア州の生産及び動物衛生研究所であり、登録番号2023/000391-AでBSE確認の要求の下に記録された。欧州連合規則 1148/2014 に従って認可された確認試験は、国の基準研究所が実施した。その後、BSE株識別検査を実施したところ、非定型BSE(H型株)の存在が確認された。サンプルは、国の伝染性海綿状脳症監視プログラムの枠組みで採取された(生後48か月以上の死亡動物または食用に屠殺されなかった動物のサンプル)。生存しているコホートの種はいない。 疫学調査:感染発症源または感染源は特定されていない。症例が認められた農場で特定された2頭のウシの調査では以下に該当していないことを確認した。影響を受けた動物の子孫ではなく、生後1年間は同じ飼料を摂取しないように飼育されていた。そのためそれら固体の屠殺は不要であると考えられた。しかしながら、欧州の法律で義務付けられているようにBSEの全ての症例と同様に疫学的調査が実施された。国内で適応される管理措置:死骸、副産物、廃棄物の工程処分、トレーサビリティの管理。</p>
30	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230314.8708931	<p>感染原因物質:牛海綿状脳症プリオン、異型株、L型 発症箇所:Prättigau-Davos, Graubünden 影響を受けた固体:種/疑わしい個体/感染数/死亡/と殺処分/商用対象に加工、処理された固体数/ワクチン接種 ウシ/19/1/0/0/1/0 疫学的コメント:Canton of Grisonsの飼育場で保有されている12歳のウシは、2023年2月27日にBSE監視プログラムの枠組みで屠殺時にサンプリングされた。脳幹物質は、2023年3月3日にIDEXX HerdChek BSE-Scrapie Ag Testにより陽性と判定された。この結果は、2023年3月8日、伝染性海綿状脳症国立参考研究所(スイス/ベルンのVetsuisse学部/神経センター)のウェスタン免疫ブロットによって確認された。病理学的プリオンタンパク質はL型に分類されたため、この症例は非定型BSEに分類された。死骸全体はカテゴリー1の物質として処分された。 国内で適用される管理措置:トレーサビリティによる管理、選択的殺傷処分。死骸、副産物、廃棄物の公的処分。廃棄物は消毒し動物製品の工程処分工程に則り対応された。 診断テストの結果:品種/試験/試験日/結果 ウシ/抗原検出 ウェスタンブロット(Ag ウェスタンブロット)/2023年3月8日/陽性 研究室の名前と種類:神経センター、臨床研究及び獣医学公衆衛生局、実験臨床研究部門、ベルン大学</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
31	異型クローンフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230321.8709071	<p>感染原因物質: 牛海綿状脳症プリオン、異型株、H型 発症箇所: Cornwall, England 影響を受けた固体: 種/疑わしい個体/感染数/死亡/と殺処分/商用対象に加工、処理された固体数/ワクチン接種 ウシ/54/1/0/1/0/0 影響を受けた集団: 隔離された非定型BSE H型が54頭のウシを飼育する乳牛農場の17歳の在来種のウシで確認された。 疫学調査: 発生源及び感染源はまだ特定されておらず不明。 疫学的コメント: 隔離された固体で非定型H型BSE1例、乳牛農場で確認された。対象個体は17歳の在来種であった。ウシは横たわった状態で発見され、これまでに臨床症状や問題となるような既往歴はなかった。この動物は2023年2月27日に人道的に安楽死された。当該症例は、定期的な全国的伝染性海綿状脳症の法定監視の一環で生後48か月以上の歩行に問題があるウシに対する検査中に明らかになった。この動物は屠殺のために提供されたものではなく、食物連鎖にも関与していなかった。死骸の全体はカテゴリー1の物質として処分された。食品安全を脅かすおそれなくヒトの健康へも影響を及ぼすリスクはなかった。疫学的調査は現在も実施中である。当該非定型BSEが確認された固体の子孫及びコホートは移動が制限されている。BSEのスクリーニング検査が行われその後殺処分される予定である。当該固体に非定型BSEが検出されたことは英国全体のBSEに関するリスクを変えることはない。農場の具体的な場所については農場主の身元と健康を保全するために報告書内へは掲載されていない。 国内で適用される管理措置: トレーサビリティ管理、死骸、副産物、廃棄物の公的処分。動物製品の公的破壊。 適用対象: 選択的殺害と処分。 診断テストの結果: 品種/試験/試験日/結果 ウシ/抗原検出enzyme-linked immunosorbent assay/2023年3月9日/陽性 研究室の名前と種類: Eurofins, Animal and Plant Health Agency Weybridge, UK</p>
32	E型肝炎	IDWR. 25:9(2023)3-3	<p>「感染症発生動向総覧」2023年3月8日集計分。4類感染症: E型肝炎10例。感染地域(感染源): 東京都4例(牛肉/牛レバー1例、レバー1例、不明2例)、千葉県2例(不明2例)、山形県1例(羊肉)、国内(都道府県不明)2例(不明2例)、国内・国外不明1例(不明)</p>
33	E型肝炎	ProMED-mail 20230602.8710372	<p>Jersey島の保健当局は、いくつかのE型肝炎の感染について調査している。保健当局によると、Jersey島がこのウイルスの感染者を記録するのは異例である。Jersey島の環境衛生局によると、感染者は少ないという。Jersey島は、Channe諸島の中で最も大きく、フランスに近い。感染者からの聞き取り調査で得られた食歴情報から、加熱不十分な豚肉との関連性が指摘されている。患者はすべて成人で、発病者のほとんどは50歳以上である。入院はしているが、死亡は記録されていない。患者の機密保持のため、正確な人数、年齢層、性別、発病時期などの詳細は明らかにされていない。E型肝炎感染症は、E型肝炎ウイルス(HEV)によって引き起こされる肝臓の病気である。感染を防ぐためには、すべての肉(特に豚肉)を食べる前に十分に加熱し、加熱していない肉や肉製品に触れた後は、手を洗うことが挙げられる。免疫力が低下している人や肝臓病の人、高齢者、妊婦、子供は、生や加熱が不十分な豚肉の肉製品を食べないようにすることが勧められる。ウイルスに感染している人は、症状が出始めてから2週間は、他の人に食べ物を用意するのを避けるべきである。HEVの遺伝子型1及び2は、発展途上国で主に汚染された水から病気の発生を引き起こすが、遺伝子型(GT)3~7は人獣共通感染症である。GT3は主にブタから感染し、特筆すべきは、免疫抑制者において慢性感染を引き起こし、輸血を介して感染する可能性があることである。</p>
34	E型肝炎	Viruses. 15(2023)37	<p>本文献は、ロシアのさまざまな地域におけるヒトのHEV血清陽性率、家畜ブタ及びウサギの感染率、並びにHEVの遺伝的多様性及び個体群動態を調査したものである。一般集団における抗HEV IgG抗体検出率は年齢とともに著しく上昇する。HEVの血清陽性率は地域によって異なり、最も高い州は国内で最もブタの生息数が多い地域であった。調査対象となった21の養豚場のうち19で、ウイルスの排出が検出された。ヒトと動物の株はすべてHEV-3の遺伝子型に属しており、ブタではそのクレード2の配列が優勢であった。人獣共通感染症及び環境汚染の可能性が示唆された。結論として、HEV-3の循環は1つの国の中でも地理的・時間的に変動していることがわかった。この変動は、農場のブタの間でのウイルスの循環に大きく関係していると考えられる。</p>
35	E型肝炎	Zoonoses Public Health. 70(2023)58-68	<p>リスクグループにおけるHEVの監視は、その循環パターンを監視し、その変化をタイムリーに検出するための重要な戦略である。この横断的研究の目的は、国内のさまざまな地域のブタとヒトにおけるHEV感染の有病率を推定し、抗HEV IgGの有病率を高める危険因子を特定し、HEV株を特徴付けることである。抗HEV抗体の存在は、2016年2月から9月までにキューバの3つの地域でサンプリングされたブタだけでなく、一般集団、農場及び食肉処理場の従業員からの血清サンプルをELISAを使用して評価した。豚製品(70/248, 28.2%)は、一般集団(25/285, 8.7%; OR: 4.18; p < .001)と比較して、血清陽性である可能性が4倍高かった。リスクグループ内では、リスク要因には、年齢、ブタに直接接触する専門的な活動に従事した年数、地理的地域、居住地と最も近いブタ関連の職場との距離が含まれ、手袋の着用は保護効果があった。これらの調査結果は、ブタ関連の職業を持つキューバ人の高HEV暴露は、特定の地域でのHEVの流行、感染動物またはその製品との直接接触、環境汚染による可能性があることを示唆している。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
36	H1N1インフルエンザ	ProMED-mail 20230120.8707868	インドの保健当局によると、7年ぶりにVadodaraでブタインフルエンザ患者が報告された。患者は妊婦で、現在Vadodara Government病院でH3N1型インフルエンザの治療を受けている。2日前、この女性は風邪と咳、高熱で入院した。同病院の指導医であるOman Belim医師は、メディア関係者に、Vaghodia地区出身の25歳の女性が隔離病棟に収容され、治療を受けていることを明らかにした。彼女は妊娠22週目で、状態は安定しているといい、回復が早ければ2日後に退院できるだろうと付け加えた。
37	H1N1インフルエンザ	ProMED-mail 20230512.8710003	台湾疾病予防管理センターは、2023年5月11日、国内中央部に住む軽度のインフルエンザに感染した10代男子の呼吸器サンプルから、亜型分類が出来ないA型インフルエンザウイルスが検出されたと発表した。同機関が、さらに検査を行い、遺伝子配列を決定した結果、H1N2v型インフルエンザウイルスであり、2021年に国内で発生した1例目のH1N2v型感染者の遺伝子構成と類似している。本症例の密接な接触者3名を調査したが、いずれもインフルエンザ様症状はなく、検査の結果、H1N2vインフルエンザウイルス感染は、認められなかった。疫学調査結果によると、本件は散発的なケースであり、過去の国際的なケースと同様である。ヒトからヒトへの感染を示す証拠はなく、保健・農業当局は引き続きヒト、動物、環境の監視を強化する予定である。疾病予防管理センターは、今回の症例が国内3例目のH1N2vインフルエンザウイルス感染者であると指摘している。この症例は、最近の海外渡航歴はなく、流行調査後にブタとの接触歴があった。2023年3月13日、発熱、鼻づまり、筋肉痛などの症状が出現し、翌日診療を受け、インフルエンザ迅速検査でA型インフルエンザが陽性であった。医師は検査し、インフルエンザ抗ウイルス薬を処方し、患者は回復した。H1N2vはブタに存在する低病原性インフルエンザウイルスで、時折、ヒトへの感染例が報告されているが、その多くは軽症である。2011年以降、世界で少なくとも47例のH1N2vインフルエンザが確認されており、そのうち41例がアメリカ大陸で発生している。ブタとの接触歴や汚染された環境にさらされた症例もあり、肉を食べて感染した症例はない。今回患者から検出されたウイルスの遺伝子配列は、過去にブタから分離されたH1N2ウイルス株と似ているが、同じではない。現在公費で使用されているインフルエンザ抗ウイルス剤に感受性がある。
38	H1N1インフルエンザ	WHOホームページ. https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2023-DON473	2023年6月7日、ブラジルはWHOに対し、Paraná州内においてブタ由来インフルエンザA(H1N1)変異型(v)ウイルスに感染したヒトの研究所確定死亡症例を届け出た。インフルエンザA(H1N1)vの散発的なヒト感染例は、これまでブラジルを含め報告されている。国際保健規則(IHR)2005によると、新型インフルエンザAウイルス変異型によるヒトへの感染は、公衆衛生に大きな影響を与える可能性のある事象であり、WHOに通知する必要がある。現在入手可能な情報に基づき、WHOはこの事象を散発的なケースとみなしており、ヒトからヒトへの感染を示す証拠はないとしている。ヒトの間での地域社会レベルの広がり、及びヒトを介した国際的な疾病の広がる可能性は低い。2023年6月7日、ブラジルIHR連絡窓口は、Rio de JaneiroのOswaldo Cruz財団国立インフルエンザセンターが、検出したブタ由来インフルエンザA(H1N1)vウイルスによる致死的なヒト感染症をWHOに通知した。患者は、基礎疾患のある42歳の女性で、養豚場の近くに住んでいた。2023年5月1日に発熱、頭痛、咽頭痛、腹痛を発症し、5月3日に重症急性呼吸器感染症で入院した。5月4日に集中治療室に入院し、5月5日に死亡した。現在進行中の調査によると、患者はブタと直接接触していなかったが、彼女の身近な接触者2名が養豚場で働いていたことが報告されている。この2人の接触者は、呼吸器系疾患を発症しておらず、インフルエンザ検査も陰性であった。現在までのところ、この症例に関連するヒトからヒトへの感染は確認されていない。Paraná州中央公衆衛生研究所でリアルタイムポリメラーゼ連鎖反応(RT-PCR)が実施され、サンプルは、インフルエンザA/H1N1ウイルスとして変異型判定された。また、この検体は、RT-PCRによりブタインフルエンザAウイルスマーカーが陽性であることが判明した。配列解析によってインフルエンザA(H1N1)vウイルスであることが確認された。回収されたゲノムは、2022年にParaná州Toledo市で検出された他のインフルエンザA(H1N1)vウイルスのヘマグルチニン(HA)と高い同一性(99%)を有している。また、2015年にブラジルでブタから採取されたウイルスのHAと96%の同一性を有している。インフルエンザA(H1)ウイルスは、世界のほとんどの地域のブタの集団で発生している。ブタで通常循環しているインフルエンザウイルスがヒトから検出された場合、「変異型インフルエンザウイルス」と呼ばれる。H1N1、H1N2、H3N2は、ブタのA型インフルエンザウイルスの主要な亜型であり、通常、ブタや汚染された環境に直接又は間接的にさらされた後に、ヒトに感染することもある。